

出身地 岩手県一関市
 生年 一八六五（慶応元）年十一月四日
 没年 一九二九（昭和四）年九月九日

佐藤正之（坂本武治）は、英吉利法律学校最初の入学生で、卒業後母校に就職し、その後、幹事・理事となつて学員として初めて本学の経営に携わるようになり、大学の経済的危機に際し、私財をなげうって寄与したことで知られる。

佐藤は一八六五（慶応元）年十一月四日岩手県西磐井郡一関町に坂本正利の三男・武治として生まれた。八三（明治十）年七月から一年余一関小学校で教職に就いたが、上京して八五年英吉利法律学校に入学、花井卓蔵らとともに三年間の修学期間を満了した最初の卒業生となる。八九年一月、英吉利法律学校に就職し、講義録や大審院判決録などの編集を担当した。九八年胆沢郡水沢町の佐藤佐七の次女利尾と結婚し、佐藤正之と称するようになる。

九二年に一旦は学校を離れるが、翌年には復職し、一九〇三年に幹事、二一（大正十）年には理事となり、

て、忘れてはならない存在なのである。」

二一年十一月、中央大学は佐藤正之君在職三十年記念会を開催し、彼の貢献を讃えた。同級生の花井卓蔵をはじめとする発起準備会や実行委員会を中心に、寄付金の募集や記念行事の準備が進められた。その結果、約七〇人から六、二〇〇円余の寄付があり、祝賀会を開催、肖像画二面および金杯一組が贈呈された。

記念会の式辞の中で花井は、佐藤が「至誠一貫の人」であり、「母校の事務室に君在りと想い到る毎に無限の信頼を齎らし又恒久の安心を得た」と述べている。また、



佐藤正之

二七（昭和二）年二月の辞任および名誉理事就任までの間、大学の経営に携わった。東京法学院時代から中央大学への事業拡大の頃にかけて経営に腐心し、大学が財政難に陥った際には、自分の土地を売却して大学の経営を支えた。

中央大学文学部の創設時から仏文学を担当した辰野隆は、「忘れえぬ人々」で佐藤について次のように紹介している。「大学が財政困難で教員の給料が満足に払えない状態が続く中で、中央大学は法律の学校であるから、一流の法律の先生たちを呼んでこなれば良くなるまいというので、礼を厚くして東大の先生連を迎えた。大学に金がなくなると自分の地所を売り大学のために尽くした。教員を優遇しただけでなく、職員たちに対しても生活を助け、私財をなげうって尽くした。……そのため大学が盛んになった時には佐藤自身がすべてを売り尽くして一文無しになってしまった。中央大学にとつ

岡野敬次郎学長に「佐藤君の経歴は即ち本学の沿革であつて同君は中央大学なり否英吉利法律学校なり東京法学院なり東京法学院大学なり中央大学なり而して本学は亦佐藤君なり」とまで言わしめたほど彼の本学への功績は大であつた。

二九年九月、佐藤が六十五歳で没すると、駿河台校舎大講堂で学葬式が催され、会葬者は三千人に及んだ。その後郷里水沢（現奥州市）の大安寺において、多くの大学関係者や地方名士が参加して埋骨式が行われた。法名は積徳院初亭正之居士とされた。

四一年、十三回忌を機に、佐藤への追憶の念止みがたしとする学員有志が追憶会を開催し、東京・多磨霊園に分骨・墓碑を建設することになった。翌年、林頼三郎学長の筆による「中央大学名誉理事佐藤正之先生墓」および「初亭翁」と題された墓碑が、彼の甥で法学部教授の高橋勸との関係で、同家墓域内に設けられた。